01 卒業設計

開講年次：学部４年生

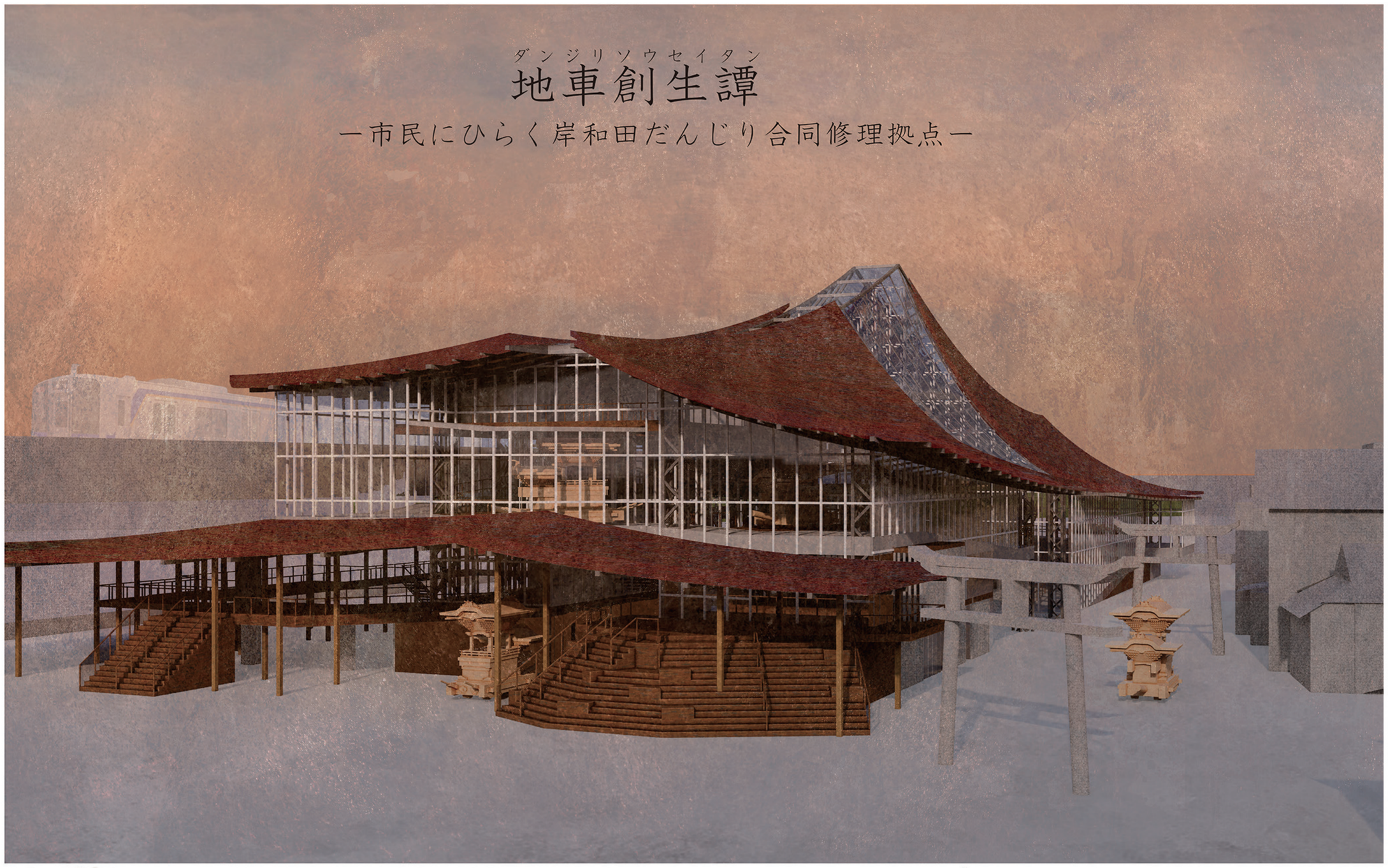
**神戸大学建築卒業設計賞 大賞**

# 地車創生譚
## －市民にひらく岸和田だんじり合同修理拠点－

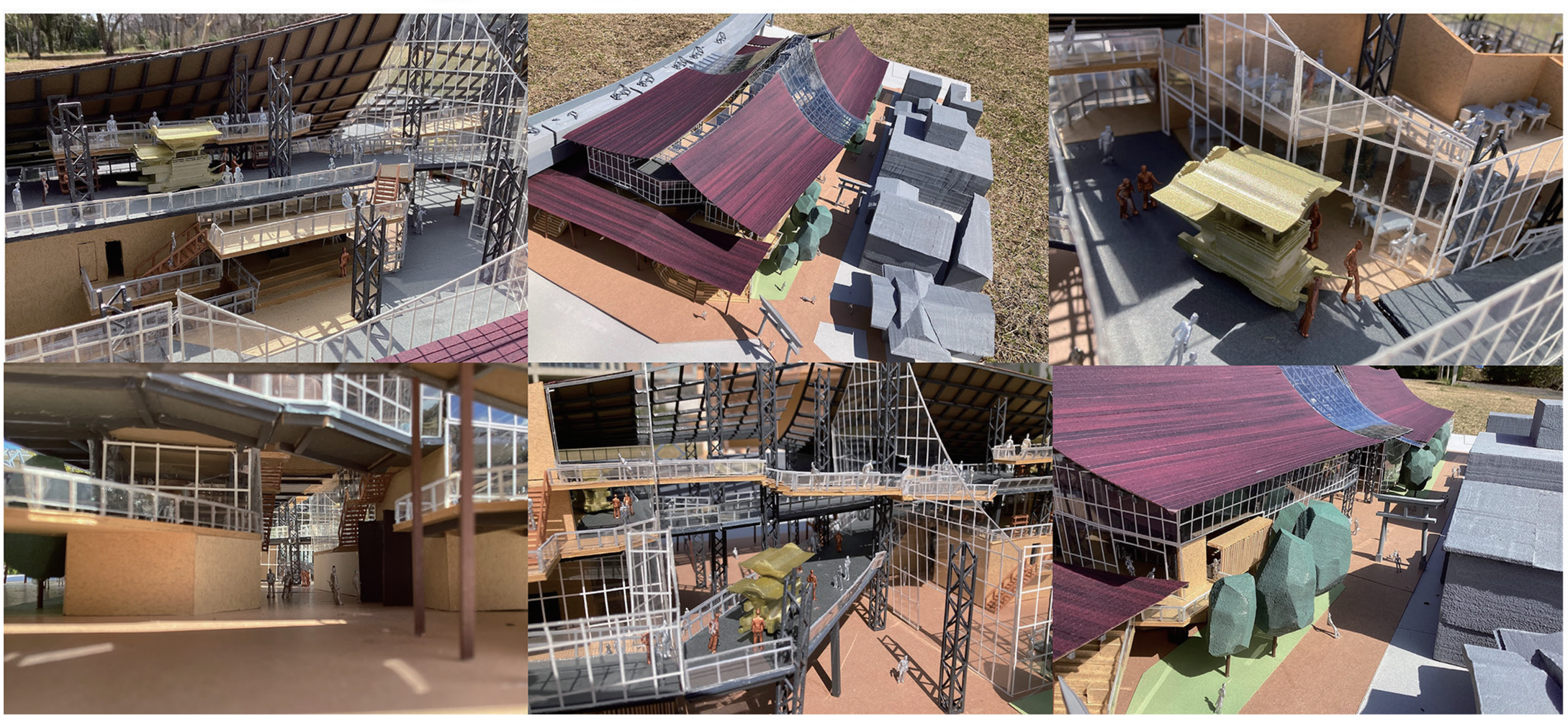
泉貴広（槻橋研究室）

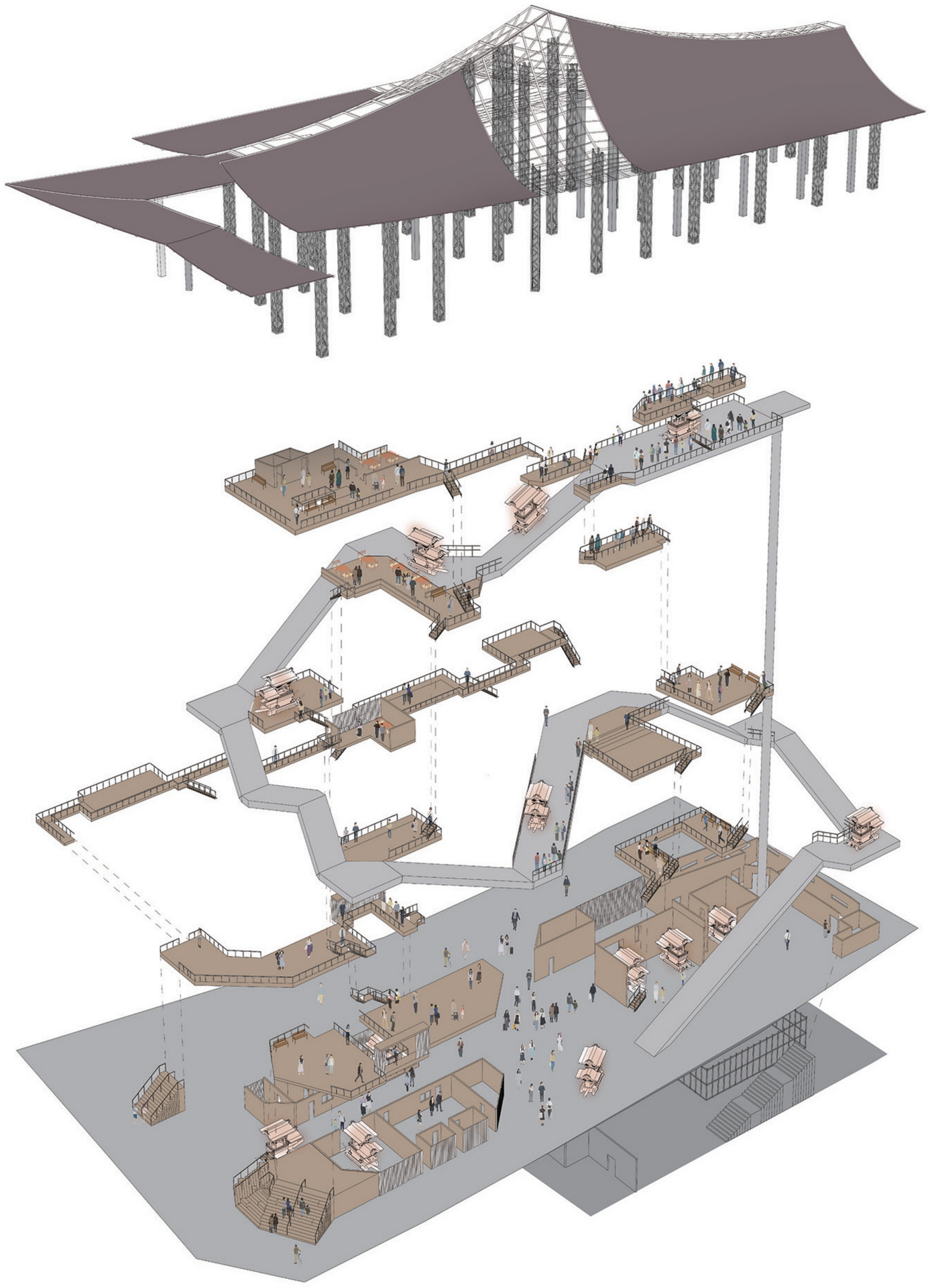


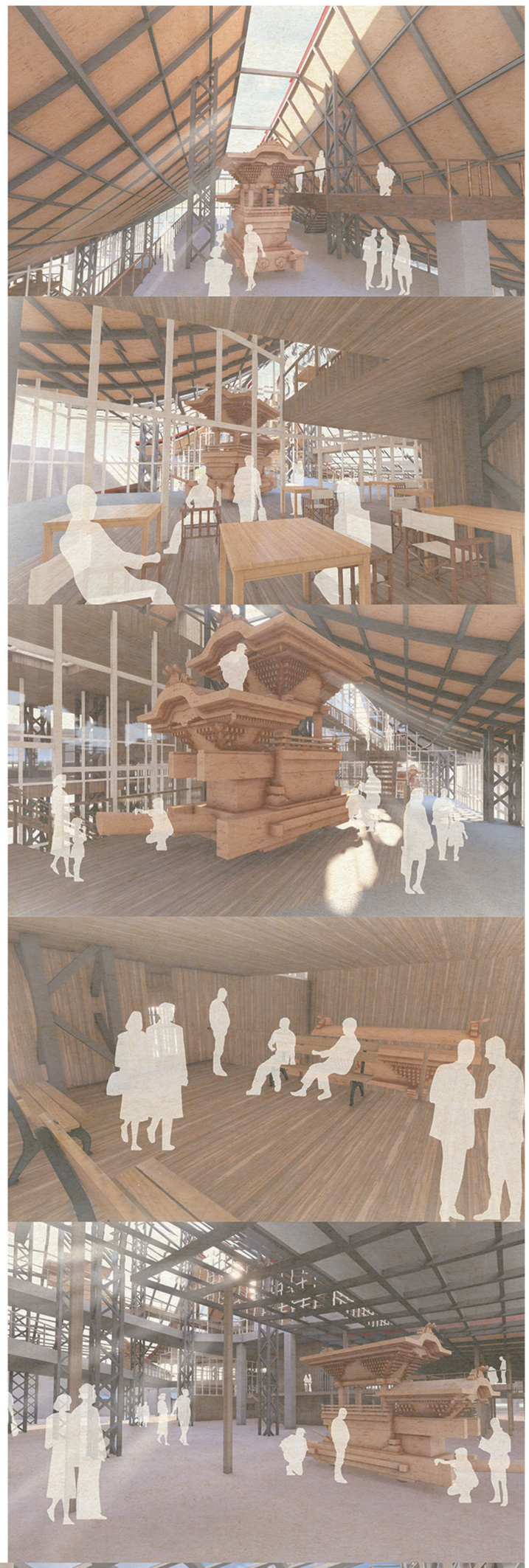
岸和田だんじり祭りのケの日の在り方を問う。自町こそ一番というエネルギーのぶつかり合いで発展してきた祭りは今や、危なっかしい印象が先行し、各町の小さなコミュニティに外部の者が参加する余地はない。祭日の2日以外の繊細で美しい一面を持っただんじりがみられる修理が一堂に集う、岸和田の新たなシンボルとなる拠点を設計することで、祭りという巨大なコミュニティと各町の小さなコミュニティを繋ぐ中間の存在をうむ。岸和田の真の姿である1年365日がだんじり祭りの街を呼び起こす。

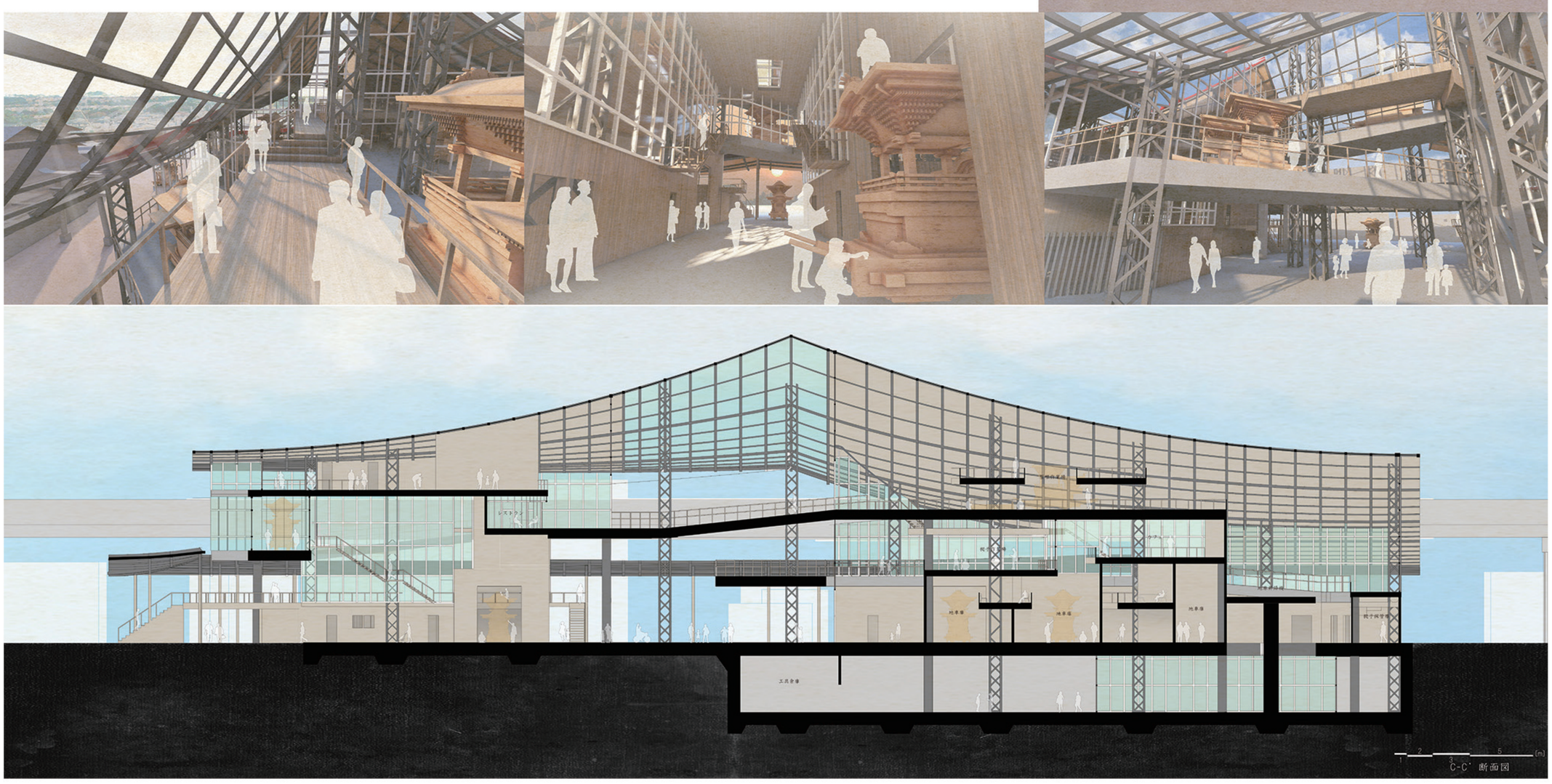










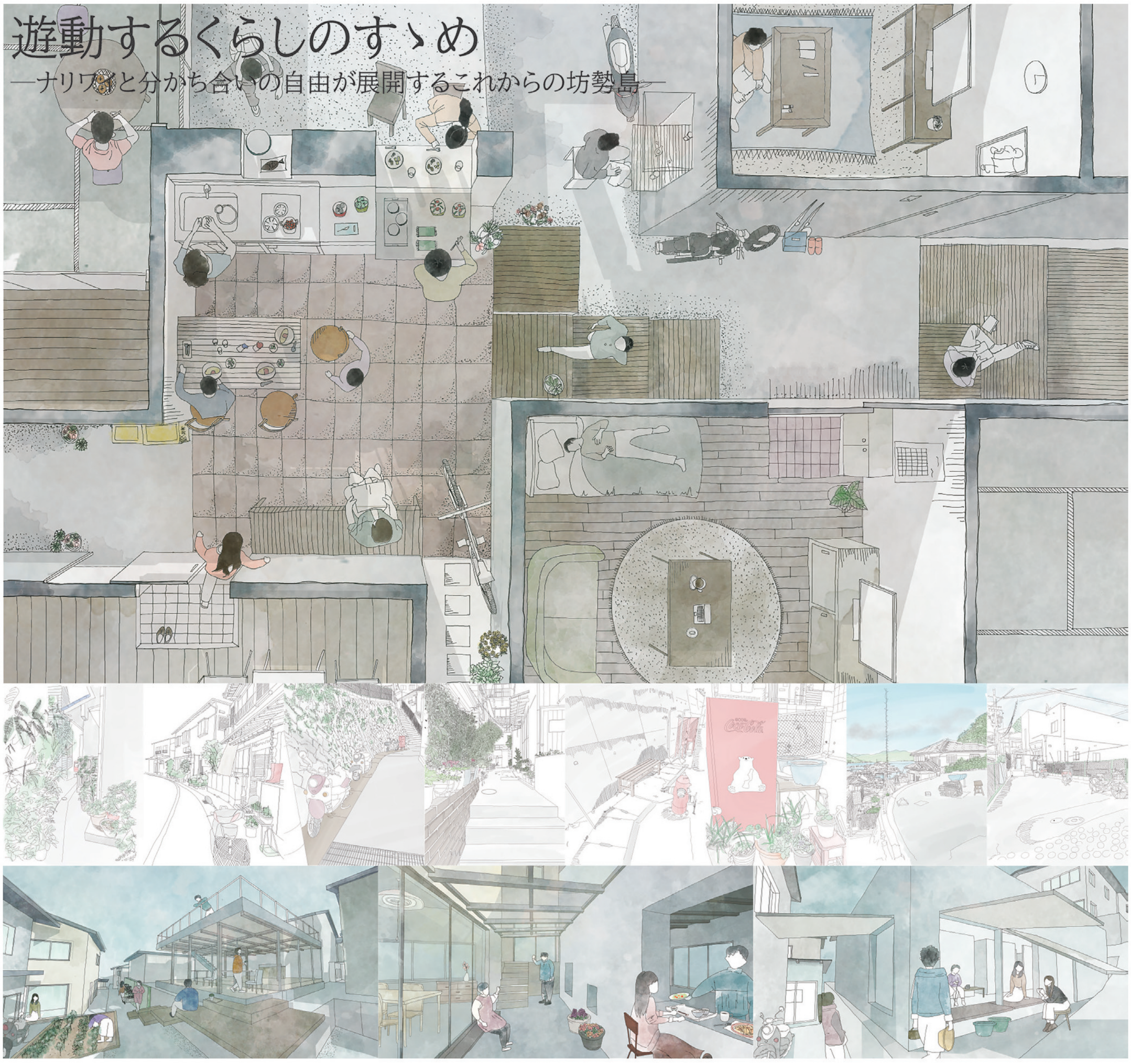
神戸大学建築卒業設計賞 木南賞

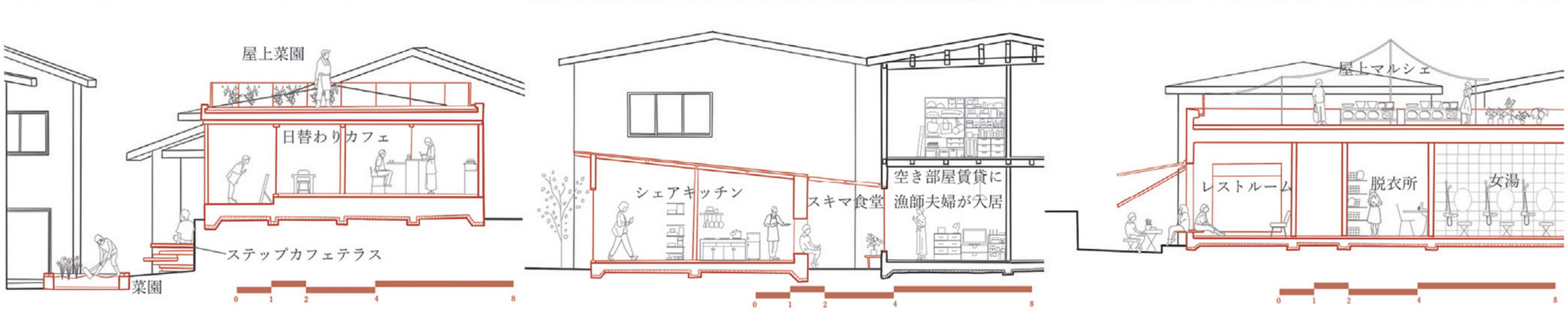
# 遊動するくらしのすゝめ
## ―ナリワイと分かち合いの自由が展開するこれからの坊勢島―

柳内あみ（末包研究室）



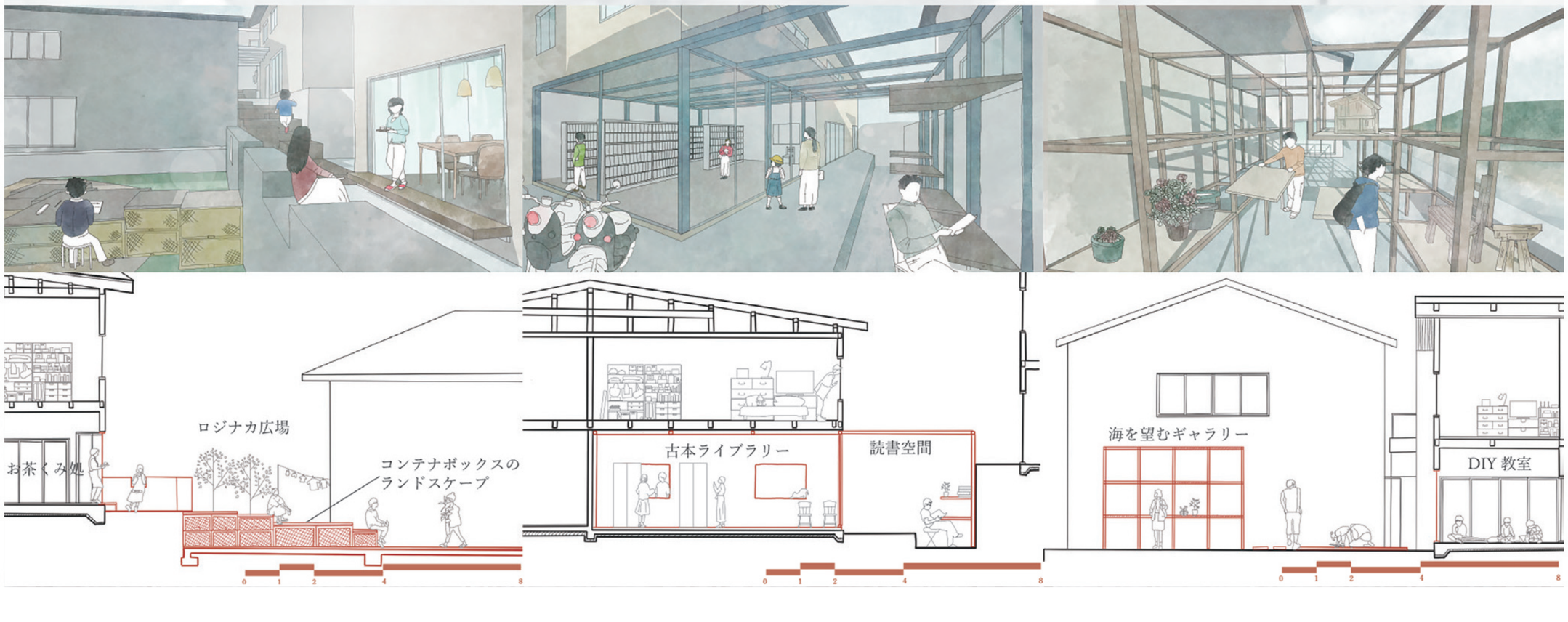
人口減少が進む姫路市の離島・坊勢島。島でのくらしを続けていくためには現状を踏まえたくらしのあり方の更新が求められている。フィールドワークを通して島民が路地空間の利用解釈を豊富化させている様子「分かち合いの自由」を発見。この行為を促し展開させる小さな仕掛けを計画し、新たに設けるプログラム「ナリワイ(個人と島全体両方に寄与するような職業およびそれによってもたらされる生活を本提案でそう名付けた)」を波及・連関させることで島のくらしを豊かに持続させるきっかけづくりを行う。
これは私と島に関わる人皆でつくりあげる、坊勢の新しいくらしの提案である。



- ナリワイの核
- 利用解釈された建築装置
- 既存



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

# DE-STEELSCAPE
## －高炉コンバージョンによる福山アイデンティティの再編－

延近佑澄（槻橋研究室）



広島県福山市にある日本一巨大な製鉄所は、戦後復興、高度成長を支えた福山のアイデンティティのひとつである。高炉の需要が縮小している現在、第二高炉を廃炉とし、60年間閉ざされてきた巨大製鉄所の一部を福山のまちに開放する。4つのゲートエリアと第二高炉に向かう1kmのビスタを形成し、第二高炉を新たな人の活動を生む複合公共施設へとコンバージョンする。海を介した都市のサーキュレーションの中で高炉と製鉄所の風景は新たな福山アイデンティティとなる。



神戸大学建築卒業設計賞 優秀賞

# 機響く
## －兵庫県西脇市における播州織の生活景－

丁子紘亘（末包研究室）



兵庫県西脇市には播州織という伝統産業が存在する。生産工程の分業制と街に点在する小規模の工場が職人同士のネットワークを生み出し、街の連関を成り立たせることでかつて街は活気づいていた。しかし現在、産業の衰退と街の衰退が深刻化し、伝統技術の継承も街の存続も危ぶまれている。そこで播州織の4つの生産工程を分解して街の隙間へとフィルインし、織物産業と街が双方高めあっていけるような在り方を提案することで、西脇の街の未来を描く。



## 未来への布石

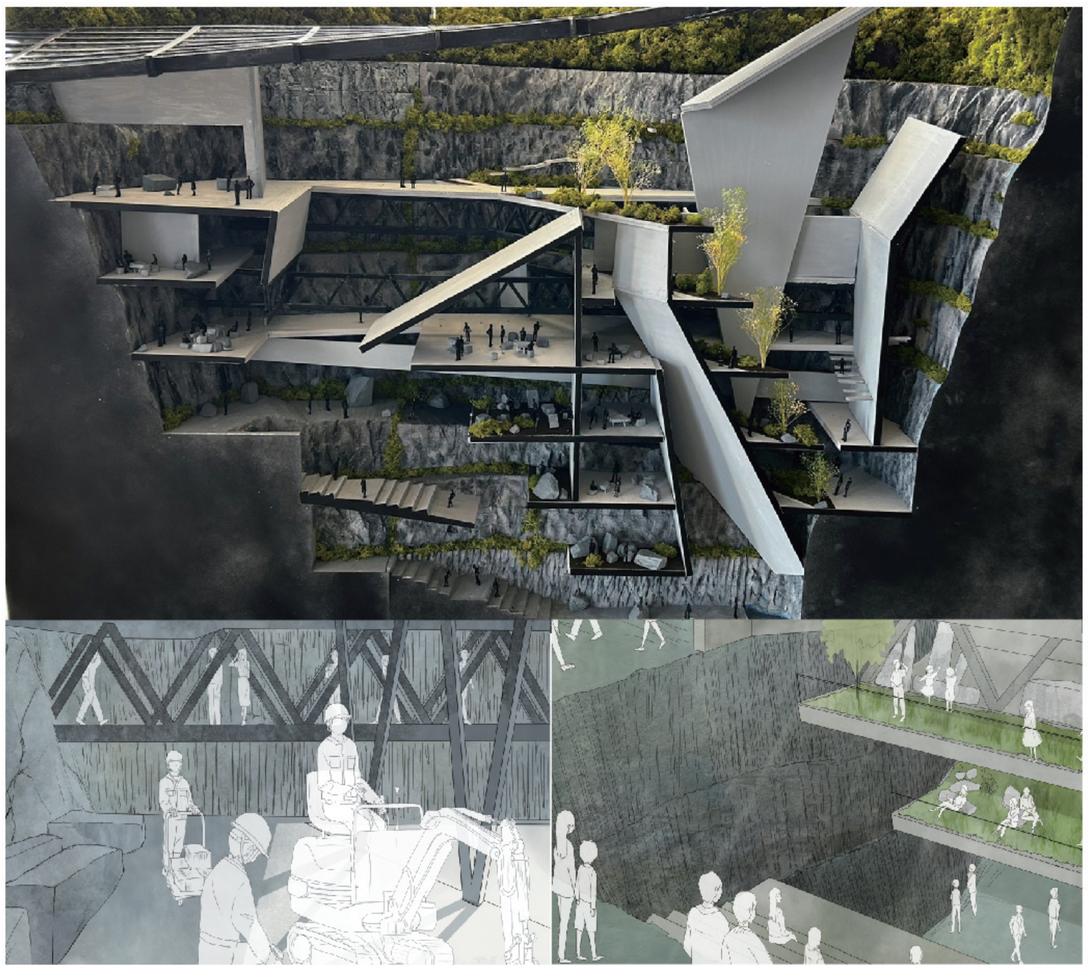
**－「岡崎みかげ」採石場における建築による埋め戻しの提案－**

盛本しほり（末包研究室）



「岡崎みかげ」の残り少ない採石場である当敷地は、採石終了後に砂利によって埋め戻されることになっている。これにより、採石の痕跡と石の持つ時間は隠され、人々から切り離されてしまうだろう。

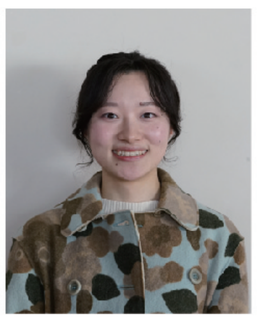
今、建築による「埋め戻し」を提案する。提案により、採石でできた穴は人々の行為で満たされ、採石中は生産の場、終了後は芸術拠点として続いていく。過去から紡がれてきた時間を未来へ途切れさせることなく繋げ、また人々が建築内部を巡りながらこの時間を体感する。



## 天下之台所

**－大阪・黒門市場の進化する底力－**

金谷百音（槻橋研究室）



市場内に分散している各店舗の倉庫を地下階に集約する事で市場の中心を作り出す。地上階に市場人の交流拠点を配置する事で150店舗の市場人が一堂に会する場が生まれる。集約化した事で生まれる余白空間に各店舗から共同倉庫への搬入経路となるデッキを周回させる。デッキを一般客が利用したい機能と接続する事でデッキは一般客と市場・市場人の出会いのきっかけの場となる。商店街裏にデッキという物流経路が通る事で現在利用の乏しい上階の活用が促され、黒門市場の土地価値が高まる。市場に関わる人口が増え、市場が循環する。



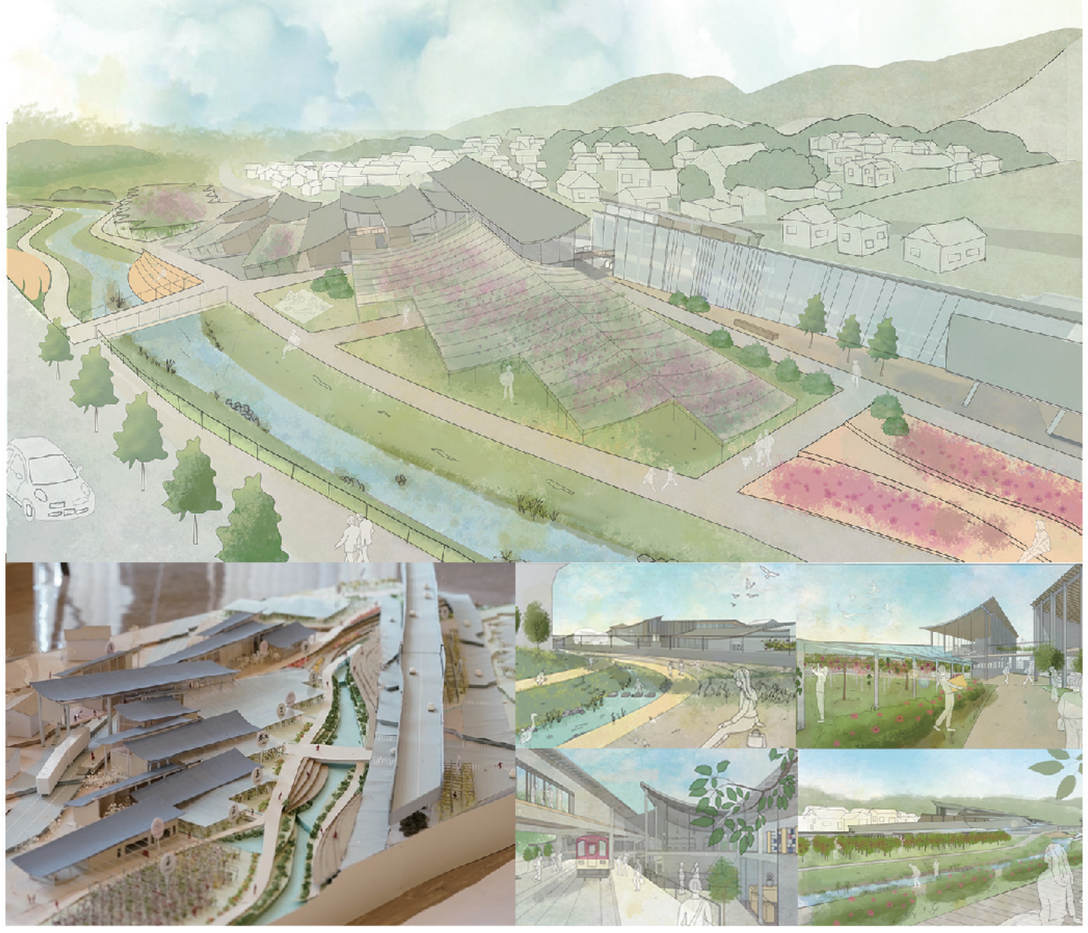
## 萄果源記

**－ちかつあすか、往古の地勢で編みなおす－**

山口沙礼（槻橋研究室）



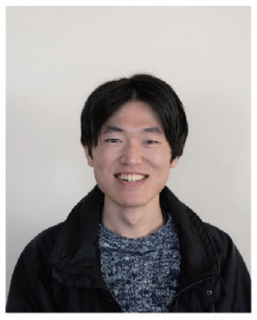
大阪府近つ飛鳥では、街道や川などの地勢を基に街づくりが行われてきたが、地域の縁辺部飛鳥集落では2つの近代インフラの敷設によってそれらの間の約100mの地勢は希薄なものとなってしまった。そこで、過去の地図上に計画を行い、その上で近代インフラを重ね合わせるという段階的な設計手法を通して、近代インフラを基に計画される現代の都市計画に問を投げかけ、場所性の重要さに再注目するきっかけを作る。その際地勢の恩恵で発展してきた葡萄産業に着目し、地域の葡萄のブランディング化を促進させるような共同醸造ワイナリー等の施設を提案する。



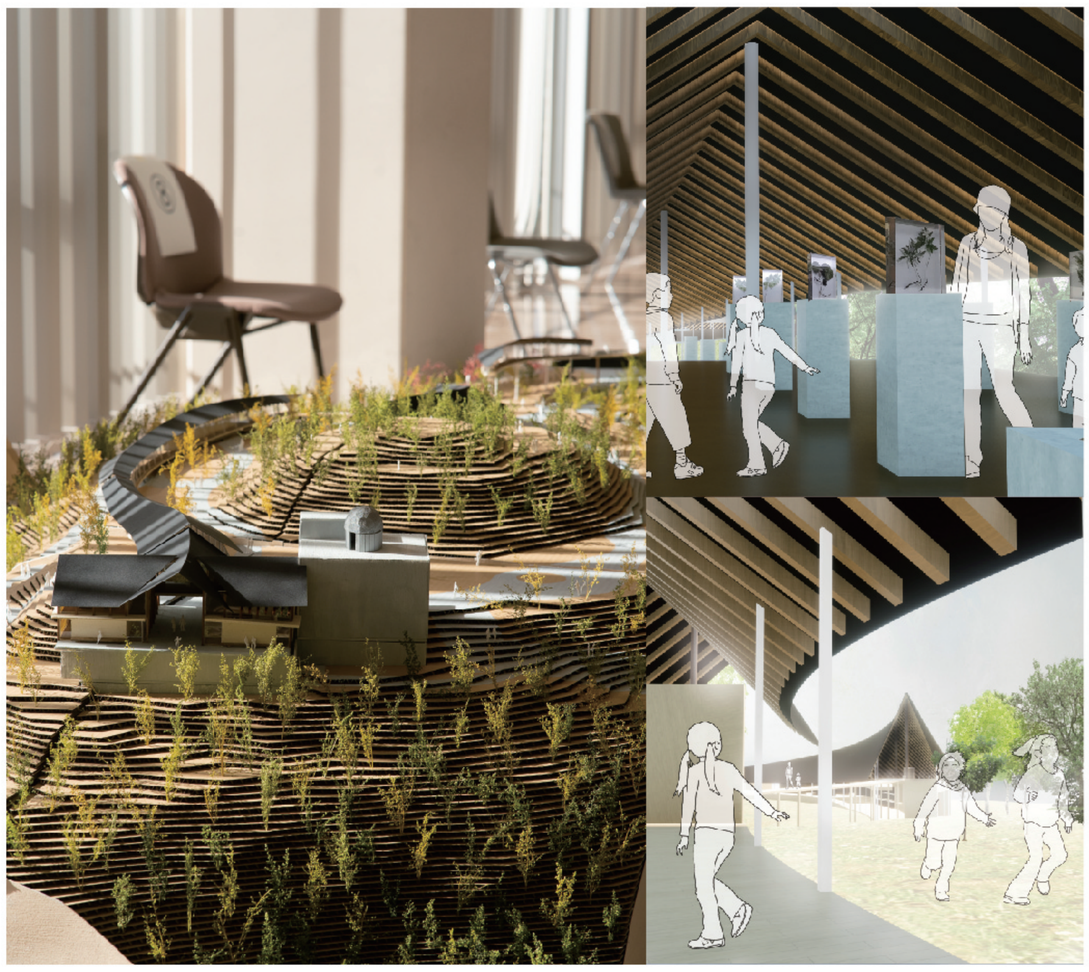
## 山を開く/山が啓く

**ー福井市足羽山の魅力を発信する散策型ミュージアムー**

小林利彰（中江研究室）



足羽山は、福井県福井市の市街地にぽつんと浮かぶようにある。古墳群や石材産業の坑道が残り、戦後の復興博覧会会場でもあったこの場は、福井にとって象徴的な山である。しかし、近代化に伴い建物が立ち車道が開かれ、その象徴性は失われつつある。そこで、既存の自然史博物館を建替え、山全体に開くことを提案する。自然・歴史に関する展示、子どもの遊び場、展望、礼拝等の機能を配置し、市民は山を散策することでその場所性を体感する。本建築によって足羽山自体が福井を知るためのミュージアムとなる。



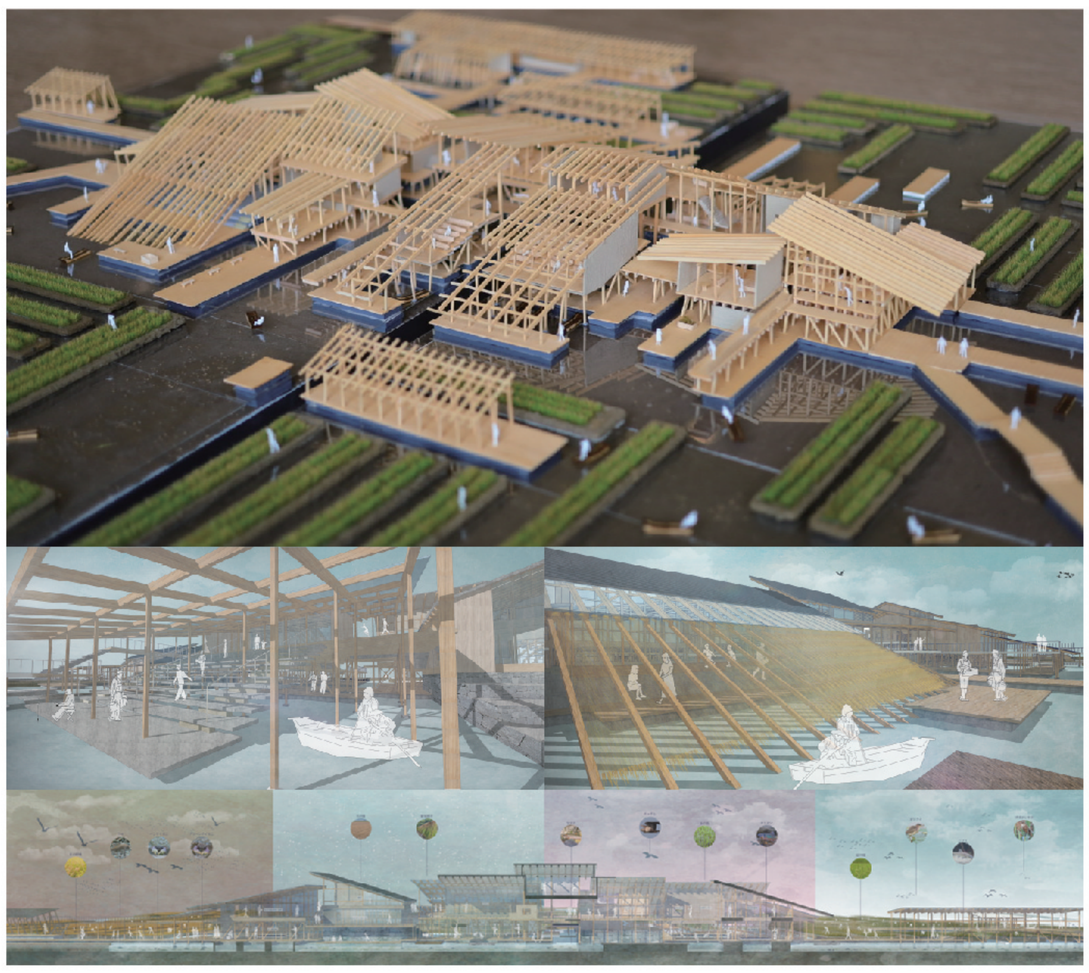
## 水景ノ結

**ー木曽三川輪中地帯における堀田の再考による地域交流拠点ー**

宇野耀士（末包研究室）



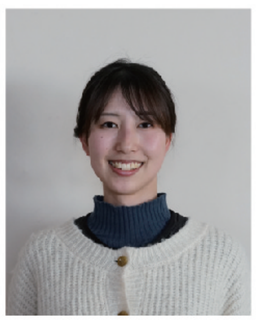
木曽三川輪中地帯は古くから度重なる洪水に苦しめられ、人の営みと水が密接に絡んだ地域であった。輪中の住民は水を受け入れる生活を送っており、それが輪中らしい独自の建築や土地利用に現れていたが、近代の土木開発により独自の地域性は水との豊かな暮らしで育まれた共同意識の名残のみである。堀田とは元々は対水防のためにつくられたものだが、人の暮らしを水と近づける「環境装置」として、地域コミュニティの「交流の場」として機能していた。そこで、堀田を再考することによって、輪中での新たな「結」を生み出しこの地域本来の水と共生する地域交流拠点を設計する。



## 芽吹きのポスト・スケープへ

**ーははとこ、みんなの未来・よかわー**

長谷川晶穂（槻橋研究室）



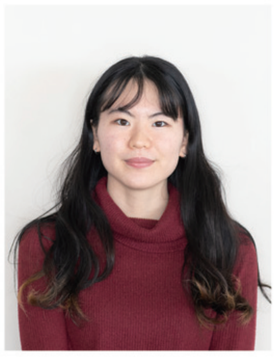
山上にゴルフ場が数多く所在する兵庫県三木市吉川町。だが近年加速するゴルフ場跡地増加問題に、今後吉川町をはじめ多くの地域が直面すると考えられる。吉川町のゴルフ場のうちの1つに、都会に住む子育て世代を対象とした産後ケアホテルといなか留学拠点を設計し、ゴルフ場跡地の一部は自然に還し、一部は子育てをキーワードに新たな山上での活動や交流、自然とのふれあいを生み、山の下のまちと合わせて吉川町全体を再活性化することを目指す。今まで整備されてきたゴルフ場を活用した、これからの明るい未来を担う新しい吉川町の風景の提案である。



# 神戸大学卒業設計 作品紹介

## 商いと暮らしの杜
—住まいと地域をつなぐ場所—

毛利美翔（山口研究室）




## まちの終活
—神戸市長田区上池田地区木造密集市街地における斜め壁を用いたケース・スタディ—

大内崇弘（末包研究室）




## 創造性の渦
- 大学の麓における起業家プラットフォームの設計 -

野上理玖（中江研究室）




## 創造の回廊
ー神戸・布引におけるサテライトオフィスー

松下敦紀（栗山研究室）




## 伊勢志摩のさざなみへ告ぐ
ー海女文化の受け継がれるこれからの漁業集落の姿ー

菅原慎司（栗山研究室）



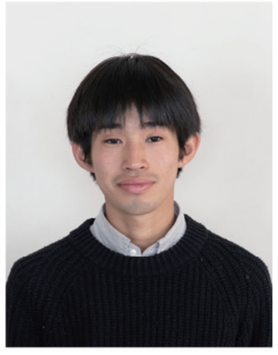
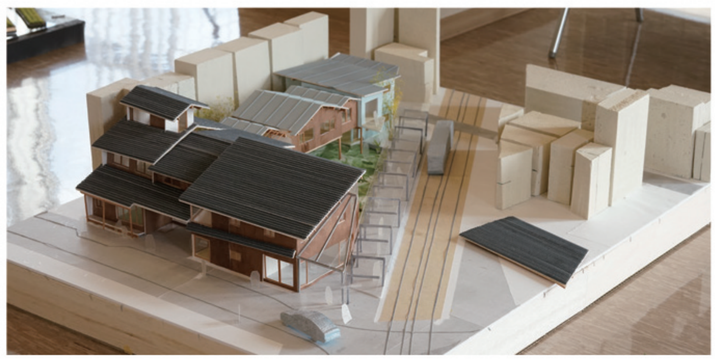

## まちをつぐ
—富山市八尾町における紙の芸術拠点と生活景の展開—

石黒萌夏（末包研究室）




## 地景を継ぐ
—堺環濠都市北部におけるまちづくり拠点—

竹内涼人（山口研究室）

## 街の鼓動、山の躍動
- 人と自然を繋ぐスタジアムの再生 -

宮田耕太郎（安田研究室）



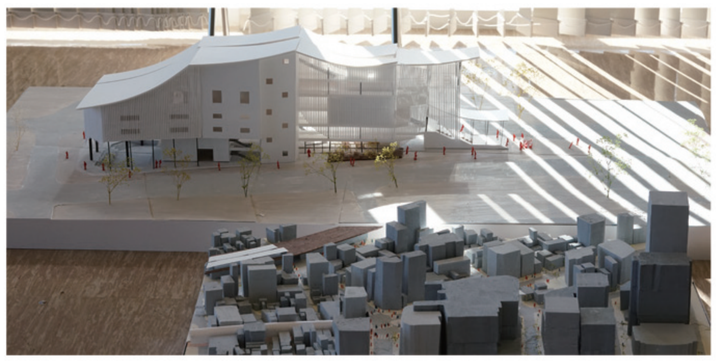

## ■卒業設計発表会の様子




## 対話の誘発
ー神戸・三宮における小劇場を中心とした文化創造交流拠点ー

神前由佳（栗山研究室）

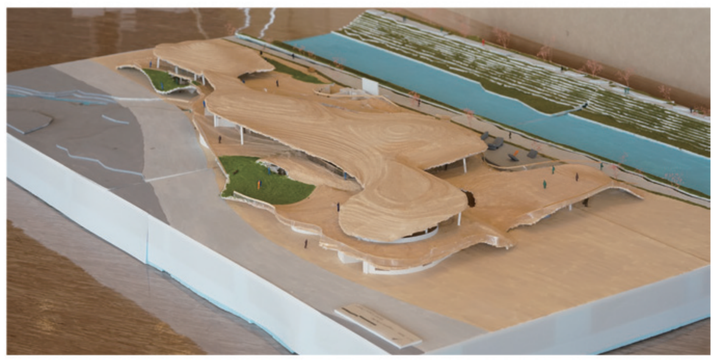




## FLEXIBLE SPORTS CENTER
- 運動で繋がる三田の健康拠点 -

田中慶人（安田研究室）





## 風景を摘む
- お茶の里大台の姿を継ぐ集落のあり方 -

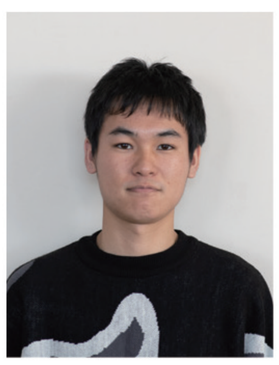
廣瀬桃子（安田研究室）





## 混住のすゝめ
ー下町のコミュニティを内包する集合住宅の提案ー

齊藤駿（近藤研究室）





## 営みとの呼応
ー岐阜県鵜飼屋地区における生活景の保存と創出ー

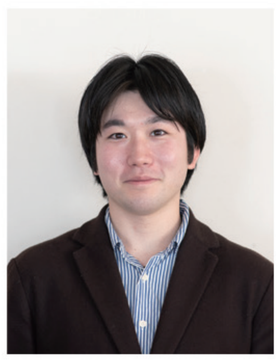
矢野真佑奈（栗山研究室）





## 共創のアーカイブ
ー神戸における都市の記録と住民の記憶が紡ぐ文化の継承地ー

髙橋龍平（栗山研究室）





## ひとときまち
—廻り織りなす住まい—

猪谷璃子（山口研究室）





## 燃える家
ー阿蘇野焼きと共存する住宅の提案ー

千馬生吹（槻橋研究室）









# 審査講評

槻橋修
神戸大学大学院教授　審査委員長



2023 年度の建築卒業設計賞の審査は、2024 年 2 月 18 日（日）に神大会館六甲ホールで、卒業設計発表会に引き続き開催された神戸大学建築卒業設計賞選考会において実施されました。選考会は、選考委員長を槻橋、司会を山口が担当し進められました。本年度の卒業設計発表会発表作品は 25 作品で、発表および質疑応答の後、まず、選考委員による投票（4 作品選出、2 作品 2 点、2 作品 1 点の合計）の結果、佳作以上に相当する賞選考対象作品として 10 作品が選出されました。

10 作品を対象とした選考会の選考委員は計画系の教授・准教授・講師の 8 名と選考会にご参加いただいた非常勤講師 11 名の計 19 名で行われました。選考方法は、その課程における選考委員によるコメントや学生との質疑応答のプロセス自体が全学生にとって教育効果が期待できるという考えから、今年度より 2 回の投票による選考に変更しました。なお、評価の客観性を期するため、選考委員が指導教員となっている学生の作品への投票を控えるという申し合わせのもとで選考を行いました。まず優秀賞候補作品（4 作品程度）を選定するための一回目投票（審査委員一人 2 票の記名投票）を行い、審査委員間の議論、候補者からの追加質問回答ののち、大賞・木南賞を選定するための二回目投票（審査委員一人 1 票の記名投票）をおこないました。その結果、第 2 回投票で最多得票を得た泉貴広君の作品を大賞候補として選出し、ついで次点の柳内あみ君の作品を木南賞候補として選出、一回目投票で4作品に選ばれた延近佑澄君、丁子紘亘君、2名の作品を優秀賞候補としました。さらに1次選考で得票を得た、山口沙礼君、小林利彰君、宇野耀士君、盛本しほり君、長谷川晶穂君、金谷百音君ら 6 名を佳作候補として選出しました。そして後日、これらの候補作品は、建築学教室の教室会議で正式に各賞に決定しました。

大賞となった泉貴広君の「地車創生譚　−市民にひらく岸和田だんじり合同修理拠点−」は、岸和田だんじり祭の 22 台のだんじり（山車）と地域でその補修や飾りの制作などを手掛けてきた職人の仕事に焦点を当て、年に 2 日間の祭り以外の期間にだんじりの修理、メンテナンスを行い、そのプロセスをミュージアムとして展示する合同修理拠点の提案でした。南海岸和田駅付近の岸和田天神宮に隣接する敷地に立体高架下の空間を含んだ設計による都市計画的な観点と、だんじりの宮入りの動線を組み合わせた計画で、市内の職人へのインタビューを通して計画された立体斜路をめぐるだんじり補修の工房がダイナミックに展開する空間が評価されました。木南賞の柳内あみ君の「遊動するくらしのすゝめ　−ナリワイと分かち合いの自由が展開するこれからの坊勢島−」は姫路市家島諸島に浮かぶ坊勢島の高齢化・過疎化に直面した漁業集落を対象とし、集落の地形、路地空間、住居への緻密なフィールドワークをもとに、集落空間から見出された路地や庭、隣地関係の柔軟な活用方法を現代的な建築的操作で増幅させ、島での創造的な共同性の創出を目指した作品でした。

優れたプレゼンテーション、課題設定と計画による解決案のスマートな提示など、レベルの高い作品が多かった印象ですが、加えて審査委員の先生方の評価やコメントにより作品にさらなる深みや広がりが見出されたとき、設計者各々の受け取り方に、各自のモチベーションや制作過程でたくさん思い悩んだプロセスが垣間見えた気がします。最終案に結実するのは一つの案ですが、それまでの過程でどれほど真摯にプロジェクトに取り組んだかも、こうした質疑応答の中に現れてくるものです。その意味でも今年の審査方法を改善した効果が感じられました。

# 選考委員

槻橋教授を審査委員長とし、選考会選考委員は計画系の教授 4 名（末包、中江、近藤、槻橋）と、准教授 3 名（栗山、光嶋、安田）、講師1名（山口）ならびに選考会参加を受諾いただいた非常勤講師 11 名（深川礼子、鄭弼溶、松本猛、中江哲、小幡剛也、本田孝子、畑友洋、吉武宗平、八木弘毅、大谷弘明）の計 19 名とした。選考会はこの 19 名で行われた。

# 選考会得票数一覧

| 氏名 | 卒業設計題目 | 第1回得票数 | 第2回得票数 | 最終結果 |
|---|---|---|---|---|
| 泉貴広 | 地車創生譚　−市民にひらく岸和田だんじり合同修理拠点− | 9 | 11 | 大賞 |
| 柳内あみ | 遊動するくらしのすゝめ　−ナリワイと分かち合いの自由が展開するこれからの坊勢島− | 5 | 4 | 木南賞 |
| 延近佑澄 | DE-STEELSCAPE　−高炉コンバージョンによる福山アイデンティティの再編− | 5 | 3 | 優秀賞 |
| 丁子紘亘 | 機響く　−兵庫県西脇市における播州織の生活景− | 8 | 1 | 優秀賞 |
| 盛本しほり | 未来への布石　−「岡崎みかげ」採石場における建築による埋め戻しの提案− | 3 | | 佳作 |
| 金谷百音 | 天下之台所　−大阪・黒門市場の進化する底力− | 3 | | 佳作 |
| 山口沙礼 | 萄果源記　−ちかつあすか、往古の地勢で編みなおす− | 2 | | 佳作 |
| 小林利彰 | 山を開く/山が啓く　−福井市足羽山の魅力を発信する散策型ミュージアム− | 1 | | 佳作 |
| 宇野耀士 | 水景ノ結　−木曽三川輪中地帯における堀田の再考による地域交流拠点− | 1 | | 佳作 |
| 長谷川晶穂 | 芽吹きのポスト・スケープへ　−ははとこ、みんなの未来・よかわ− | 1 | | 佳作 |

# 作品講評

## 大賞

地車創生譚
－市民にひらく岸和田だんじり合同修理拠点－

泉貴広（槻橋研究室）



「やりまわし」で有名な岸和田だんじり祭のだんじりそのものの修理をすることに着目して、祭り当日だけではなく、一年を通じてだんじりに触れる場を創出し、隠れたその魅力や知られざる修理を行う職人に目を向けさせ、市民や観光客による新たなコミュニティで、職人不足の解消や岸和田の地域振興をめざす提案である。鉄道の高架で分断されているだんじりの曳行コースと入魂式を執り行う天神宮を新たな建物で接続し、ネガティブな高架下という場所をポジティブでポテンシャルある場に変換している。だんじりの屋根を想起させる大胆なそり屋根が連なる様相は駅前においてシンボリックなアイコンであり、だんじりの修理のプロセスや搬出入をスロープ、吹き抜け、EV、ステージ状の居場所などでイベント化しているダイナミックな空間構成で、ここを訪れる人々がいつも「だんじり」を感じられる、ユニークで豊かな建築が生まれている。テーマの社会性や提案の造形性や表現力が優れており大賞にふさわしい。

審査委員　小幡剛也

## 木南賞

遊動するくらしのすゝめ
―ナリワイと分かち合いの自由が展開するこれからの坊勢島―

柳内あみ（末包研究室）



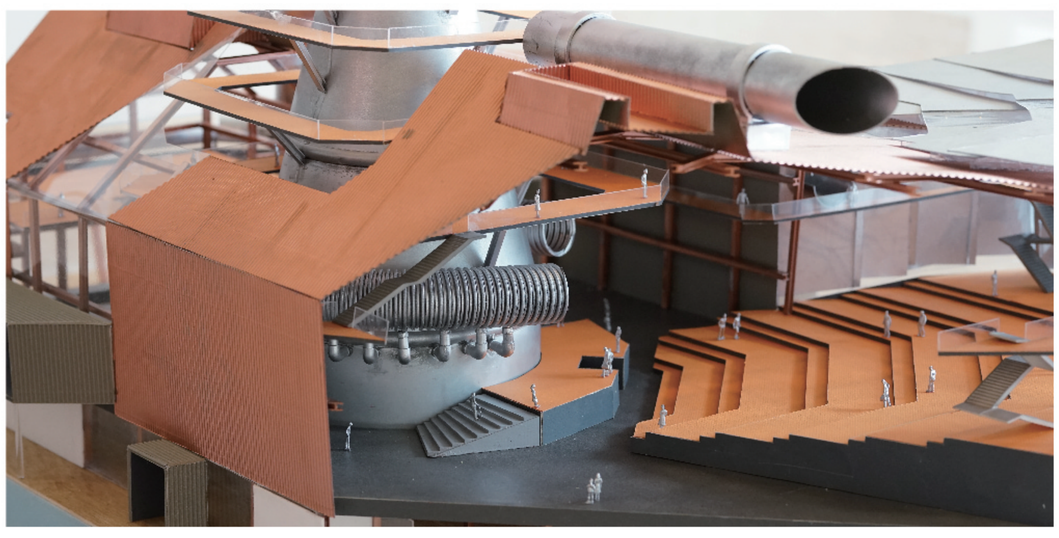
柳内さんの作品は、所謂「卒業設計」的な派手さはないかもしれない。しかし、私はこの作品を見て、確かに人間と場所への愛を感じたし、建築家の職能、ひいては都市に関わる者の持つべき心構えについて考えさせられた。柳宗悦は、とある本で「愛なくしてどうして美が生まれてこよう」と書いた。丁寧なリサーチのスケッチを積み重ね、そこから紡ぎ出された場所に寄り添った優しい空間操作が離散的に展開された提案は、根底に愛を感じるものであった。その場所とそこに住んでいる人々に真摯に向き合い、従来の建築家像に捉われず本質的に自分に何ができるのかを悩んで出した結果がこの作品だったのではないか。坊勢島への深い愛と建築家としてのひたむきさを感じる提案に美を観て、高く評価し、一票を入れさせて頂いた。場所や人間に真摯に向き合い、悩み葛藤し、生まれた形は人の心を打つと信じている。これからの建築家像に希望を抱くことができる、木南賞にふさわしい素晴らしい作品だったと思う。

審査委員　八木弘毅

## 優秀賞

DE-STEELSCAPE
―高炉コンバージョンによる福山アイデンティティの再編―

延近佑澄（槻橋研究室）



日本経済の成長を支えた巨大な製鉄空間の意味を、高炉が帯びていた神聖さ（母胎という呼称、神棚の設置、火入れの神事）の表象と捉え、これを表す空間体験を巨大な工場空間を活かし創造した。ファンならではのユニークな演出は巧みで、確かに製鉄に宿る神聖さがこの場所の魅力かもしれないと思わせる。この魅力がこれからの人々の生活をどのように支え得るのか。その試行錯誤の場として、高炉縮小により成長するコンバージョンに期待が掛かる。

審査委員　鄭弼溶

## 優秀賞

機響く
―兵庫県西脇市における播州織の生活景―

丁子紘亘（末包研究室）



織物の街であった西脇市において、播州織の工程を地域に組み込み、街の未来を描く計画である。地域の構造や環境、活動などの丁寧な調査分析が提案から伺える。織の工程の配置の仕方、廃工場リノベーションや拠点の分散配置、曲線の挿入による導きなどの工夫により、街の暮らしのそこここにものづくりの風景がたち現れた。川沿いはおおらかな構成とし、街中へは繊細な介入を繰り返すスケールコントロールが空間の多様性につながっている。産業を街に織り込んで顕在化しつつ地域を仕立て直す挑戦として高く評価したい。

審査委員　深川礼子